

『起笛』

「B個室なら空いてますよ」

「えっ!?!」

予想外の駅員の言葉に体が固まった。発車の一時間前にトワイライトの個室が空いている。まさかの事態に腰が抜けそうになった。

「明日のバイトどうしよう……」穏やかな店長の顔が脳裏をよぎる。「こんな事で休んでいいのか？」激しい葛藤が去来する。

「残り一室ですよ」

追い打ちをかけるような駅員の言葉に心がぐらつく。初めての北海道一人旅。その帰路で憧れのトワイライトエクスプレスに乗れるなんて。こんなチャンスは二度とないぞ。

「長岡までお願いします」

俯きがちにそう発した。本当は終点の大阪まで乗りたかった。でも列車が大阪に着くのは翌日の昼過ぎ。それだとバイトには間に合わない。長岡だったら早朝の到着なので、そこから始発の新幹線に乗り換えれば朝の九時には東京に戻れる。「一日ぐらい休んでも……」一瞬だけそうも思った。でも自分にとって、このバイトはそんな単純な存在ではなかった。

二十代の前半から、とある資格を目指し試験を受け始めた。何度落ちてもチャレンジを続けてきたが、三十路を前に内臓を患い、受験を続ける気持ちが折れた。療養生活で体調は好転したものの、目標を失った心は迷走を続けた。「このままじゃいけない」そんな思いから始めたのが本屋のバイトだった。店長の人柄に支えられ、夢中で働いた。何をしても長続きしなかった自分が、社会の中で必要とされる喜びを初めて感じた。当時の自分にとって、このバイトは一筋の希望だった。「長岡まで一睡もしない」ホームへ向かう途中、そんな決意を固めた。フリーターの身に三万の出費は痛い。だからこそ一世一代の乗車チャンスを一秒たりとも逃したくなかった。

札幌駅の四番ホームに上がると、深緑の車体が目に飛び込んでくる。厳寒の二月、閑散期という事もあってか意外なほど人影はまばらだ。大粒の粉雪を見つめていると、高揚と感慨が交錯する。駅弁に菓子、缶コーヒーに酒。売店で大量の買い物を済ませ、B個室へ足を踏み入れた。決して広くはないが、それが逆に旅情を掻き立てる。防寒具から部屋着

に着替えた瞬間、寝台車に乗っている実感がひしひしと湧き上がる。嬉しくて嬉しくて、路線地図を食い入るように眺め続けた。

「ピーッッッ」

午後二時五分。乾いた汽笛を天空に放ち、列車がゆっくり動き出した。「勇気をありがとう」感極まって涙腺が緩む。元気になったら冬の北海道を旅したい。療養生活の唯一の励みがそれだった。寒風吹き荒れる冬の夕暮れに病気を発症し、二度目の発作も同じく冬。だからこそ極寒の地を巡る事でそんな過去を乗り越えたかった。厳冬の北海道なんて無理だと思ったが、雪原を無心で歩くうち、少しだけ時計が進んだ気がした。

緩やかな速度で列車は札幌の街を南下していく。再びこの地に来られるだろうか。次に来る時は自分の生き方も少しは定まっているだろうか。車窓を見つめていると、そんな事が頭を巡る。千歳を過ぎ、苫小牧を発車した辺りから雪が強まってきた。丸い煎餅のようなフワフワの雪質。不意に寂しさが込み上げて、ワンカップを片手に個室を出た。向かった先は四号車にあるロビーカー。洒落たバーのような雰囲気気圧され、片隅に小さく座る。国道の向こうに広がる雄大な内浦湾。晴れていれば最高だろうが、旅立ちの心には不思議とこんな荒天がしつくり来る。室蘭の工場群を過ぎる頃、車内が賑わい始めた。ちょうど夕暮れに差しかかる時分、ディナー前のティータイムといった所だろうか。穏やかな笑顔で談笑する老夫婦、旅の土産を披露しあう年配のグループ。誰もが皆、ひとときの喜びを全身で表している。色んな苦労を重ね、懸命に毎日を生きて、そんな自分を労らおうと夢列車に乗っているのだろう……。そんな事を思っていたら強烈な自己嫌悪が湧き上がった。資格試験もリタイヤして、フリーターを続けて、自分はこれまで何を築いてきただろう。本気で自分と向き合った事なんてあっただろうか。居たたまれなくなって席を立った。自分はここに座る資格がない。そう感じた。個室へ戻ると電気を消し、体を丸めた。ガラスに映る己の顔が青く歪んだ。

洞爺を過ぎた頃から急速に空が暗くなった。五時を回ったばかりだが、雪国の夜は早い。食堂車ではディナータイムが始まる頃だろう。腹が減ってはなかったが、買っておいた駅弁でささやかな宴を開く。冷えてカチカチの唐揚げ、染み入るような塩気の焼き鮭。食べ行くほどに詫びしさが湧き立っけれど、その虚無的な感覚が何故だか無性にホッとした。自分らしさとは、こういうものなんだろうか。威力を増す雪の中、列車は道南地方を爆走していく。個室を暗くしていると、雪の純白が良い感じに反射して幻想的な風景を演出してくれる。気が付くと、丸っこい乾雪は湿った流星形へと姿を変えていた。五稜郭の信号

場を発車した列車は大きくカーブを描き、渡島半島を南下していく。海と山に挟まれた険しい地形に車体の揺れが激しくなる。夜の八時少し前、北海道最南端の知内駅を通過するや列車は加速を始めた。視界が一気に開け、吹雪の合間にうつすらと川が見える。まもなく青函トンネルだ。胸の高鳴りに息を飲む。ありがとう北海道。またいつか……。

「ゴォーッッッ」凄まじい反響音が耳奥に突き刺さる。行く末を暗示している様な、心の混沌を表している様な。無機質な轟音に無数の感情が交わり、軽い目眩に見舞われる。「そう言えば旅の帰りなんだよな……」何度も頬をつねった。睡魔の誘惑に喧嘩を売った。せつかくの乗車じゃないか。しっかりしろよ！しっかりし……

目を開けるとハッとして飛び起きた。「寝ちまった……」這い上がるように車窓を覗き込んだ瞬間、視線が止まった。窓ガラスを打ち付ける無数の氷塊、その奥にぼんやり広がる漆黒。線路脇の電灯を過ぎる度、オレンジ色のシャワーがうなるように弧を描く。時間的に秋田と新潟の県境付近だろうか。生まれて初めてみる凄まじいまでの吹雪だった。「これが冬の日本海か……」風も強いのだろう。列車は断続的に速度を落とす。暗闇の向こうに、淡い光がポツポツと浮かび上がる。小さな港を取り囲むように点在する番屋、簡素な待合室だけの無人駅。こんなにも厳しい環境で懸命に暮らしている人がいる。誇りを胸に、海に生きる人がいる。「これだけは譲れない」そう思えるものが自分にはあるだろうか？「これだけは負けない」そう言えるものが自分にはあるだろうか？

「昔から文章を書くのが好きだったよな。何度かコンクールにも送ったよな……」ハッとした。忘れていた過去が不意に浮かんた。それは資格を目指す時と決めた時に捨て去った、かつての夢だった。クシヤクシヤに丸めた原稿用紙、インクの切れたボールペン、掌に出来た豆。閉ざしていた記憶が溢れ出すや、車窓の景色が消えた。ガラスに顔を寄せると何だか自分じゃない気がした。揺りかごの様な懐かしさが全身を包んだ。

「コンコン コンコン」ドアをノックする音で再び目が覚めた。

「おはようございます。あと少しで長岡です」

長岡で下車する自分の為に車掌がモーニングコールに来てくれた。礼を言ってドアを開めると、小さく伸びをした。首から肩が妙に痛い。車窓にもたれて眠ってしまったんだろう。完乗乗車が目標だったのに二度も眠ってしまったとは……。それでも不思議と心は軽かった。トゲの一つが抜けたような、そんな清々しさを感じた。荷物の整理を終えると、もう一度車窓を眺めた。憧れの寝台から見る最後の景色だ。厳冬の眠りに就く広大な田んぼ

が上越の重い雪を全身で受け止めている。「芽吹きは遠いぞ。まだまだ遠いぞ」何処からか声が聞こえた。大地の奥底から声が聞こえた。

小さく頷くと個室を出た。降車口に向かう廊下は深淵の静寂に包まれている。あと一時間もすればおはよう放送が流れ、青海川の絶景に歓声上がるのだろう。ほんの少しだけ寂しさもあった。でもこれで良い。あの荒海を睨に刻みただけで自分は満足だ。

朝の六時前、列車は長岡の駅に到着した。ホームに降り立つや、目の前のベンチに腰を下ろす。終点まで乗れない分、発車の光景だけはどうしても見送りがかった。長大なホームに人影はない。下車したのが自分だけだと悟り、せつなさが込み上げる。屋根と列車の隙間から細雪の大群が顔を打つ。試されているように感じて、シャワーを受け止める。吹雪で良かった。旅のフィナーレが吹雪で、本当に良かった。

「ピーツツツツ」けたたましい汽笛が闇を貫く。ベンチから立ち上がると凍りついた目頭が熱くなる。「ガタン ガタン」列車が進む度、大量の地吹雪が舞い上がる。霞む視界の向こうに列車が消えていく。本当にありがとう。自分の道を見つけられたら、また乗りにきます。額の雪を払った瞬間、夢のような時間が幕を閉じた。

小さく頬を叩くと、コンコースへと向かう階段を上り始めた。一步を踏み出す度、余韻と現実とがせめぎ合う。もつれる足に渴を入れるべく、踵に力を込めた。不意に店長の顔が脳裏に浮かぶ。今日は棚卸し作業だ。気合い入れるぞ。

階段を上りきり、ちらりと後ろを振り返る。小さく礼をすると、ふわふわした感覚が静かに消えた。連絡通路の向こうに新幹線の乗換口が見える。胸の奥で夜明けの起笛が小さく鳴った。